

遺伝

ハプスブルク家については、遺伝の問題を含めて膨大な研究の蓄積があり、遺伝学者をはじめとする多くの研究者によって検討が続けられている。

- 私たち、およびその他のあらゆる動物は、遺伝子によって創り出された機械にほかならない。
- 私たちは生存機械だ。「私たち」とは人間だけではなく、あらゆる動植物、細菌、ウイルスが含まれる。私たちはすべて、同一種類の自己複製子、すなわち DNA と呼ばれる分子のための生存機械である。生存機械は遺伝子の受動的な避難場所として生まれたものである。動植物は多細胞体に進化し、あらゆる細胞に全遺伝子の完全なコピーが配分された。いつ、なぜ、各々について何度、この様なことが起こったのかわからない。ある人々は、体を細胞のコロニーとたとえる。私は体を遺伝子のコロニー、細胞を遺伝子の化学工場として都合の良い作用単位、と考えたい。
- DNA はヌクレオチドの A（アデニン）、T（チミン）、C（シトシン）、G（グアニン）というアルファベットで書かれた体の作り方に関する一組の指令だと考えていい。→DNA は A、T、C、G の構成単位（塩基）がある。
- 最もよく知られている分離歪曲因子の一つは、マウスのいわゆる T 遺伝子（チミン）だ。一匹のマウスが二つの T 遺伝子を持っていると、子どもは死亡するか不妊になるかのいずれかとなる。
- 私たちの遺伝単位が、ある時点で作り出されたというのは、亜単位の配置が、それ以前に存在しなかったにすぎない。作られた時期は、たとえばあなたの祖父母の代のくらいのごく最近だったかもしれない。しかし、ごく小さな単位を考えれば、それは最初もずっと遠い祖先のなかにできあがっていたかもしれない。さらに、あなたのなかの小さな遺伝子単位は、遠い未来まで生き続け、遠い子孫にそっくり受け渡されるかもしれない。
- 遺伝子単位が小さければ小さいほど、それが別の個体に存在する可能性が高い、つまりコピーの形でこの世に何度も現われる確立が高いということだ。
- 遺伝子は老衰しない。遺伝子は不滅である。世界の遺伝子の予想寿命は、10 年単位ではなくて 1 万年ないし 100 万年単位で測定する必要がある。
- 持ち主を死なせる遺伝子を「致死遺伝子」と呼ぶ。
- 「遺伝子を何代も続く可能性のある染色体の小さな小片」と定義。

- 各々の子どもには、個体の遺伝子のたった 50%しか与えられず、他の 50%は相手から供給される。
- 個体というものはその全遺伝子を、のちの世代により多く伝えようとするものだ。
- 突然変異の新しい遺伝子は、自然淘汰によって罰を受ける。
- 近親個体どうしが彼らの遺伝子のかなりの部分を共有している。
- 遺伝子の特性は自己複製子である。
- この 30 億年以上というもの、地上において語る唯一の自己複製子は DNA だった。
- 世代が一つ進むごとに、私たちの遺伝子の寄与は半減していく。寄与率は遠からず無視していい値になってしまう。
- 遺伝子が現実直接の影響を及ぼせるのは、タンパク質合成だけである。

「リチャード・ドーキンス著『利己的な遺伝子』」(川端紅葉編 2026・1・25)